お悔やみ

Mike Menaker と Menaker Lab での思い出

吉川 朋子✉
富山大学 国際機構 交流部門

Mike の訃報を受け取って以後、彼がいた色々な場面が思い出されています。もうあの声を聞くことができない、あの笑顔が、茶目っ気たっぷりのウインクが見られないのだと思うと、表現しがたい気持ちになります。メンターであり、時として父親のような存在であり、友人でもあり、その存在の大きさを今更のように痛感しています。メネカーラボには、海老原先生を初代に、数多くの日本人ポスドクが在籍しました。また、Center for Biological Timing（CBT）を介して、あるいは共同研究者として、さらに多くの日本人研究者が関りを持ちました（図 1）。Menaker Lab に在籍した最後の日本人ポスドクとして、思い出を綴らせていただきたいと思います。

私が Mike と最初に会話らしい会話をしたのは、大学院生の時でした。当時、私は脊椎動物の脳深部光受容体について研究していました。ある学会の懇親会の席で、Mike にこんな質問をしました。「網膜にも松果体にも光受容体と概日時計があって、メラトニンを作っている。脳深部光受容体も同じだと思う？」Mike は「その可能性は十分あると思うよ」と答え、そう思う理由を説明してくれました。今思えば、大学院生の

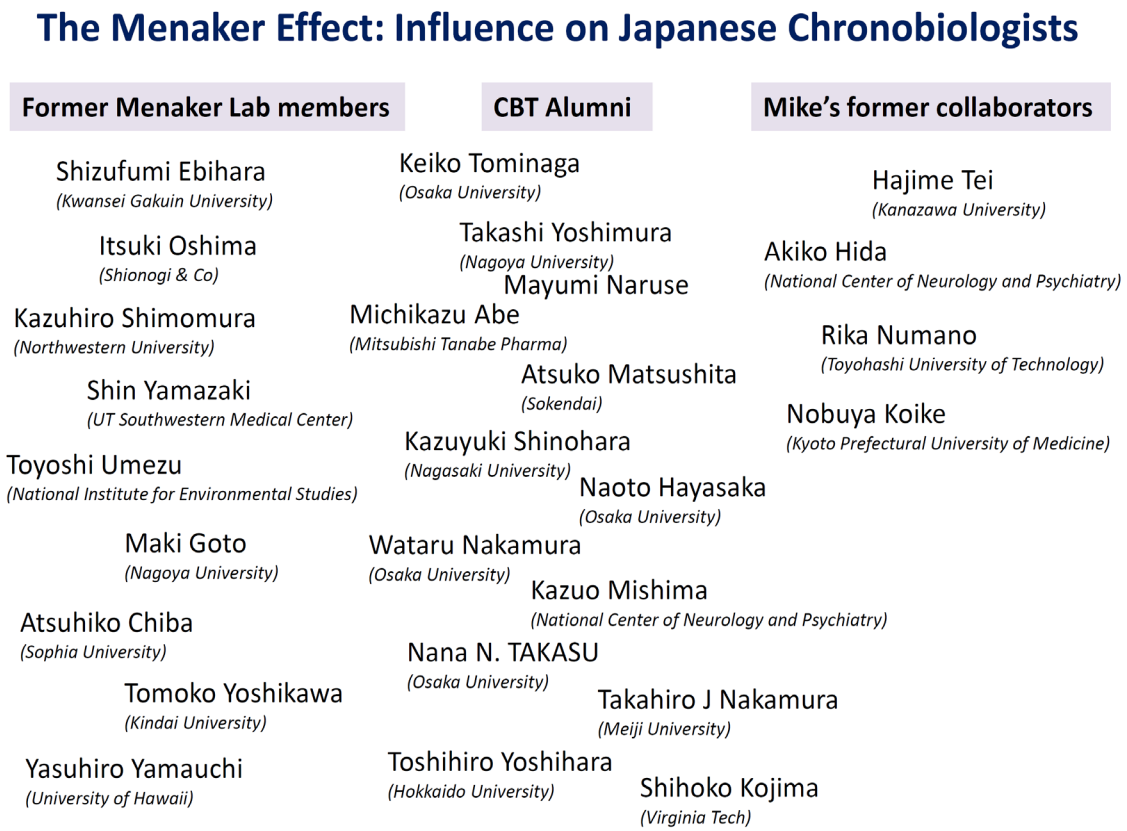

図 1　The Menaker effect: Influence on Japanese Chronobiologists (Yamazaki S., 2016).
メネカーが学会で来日した機会に、メネカーラボや CBT の OB 有志が集まる会を企画した。その際に作成されたもので、所属は 2016 年当時。

✉ tomokoyn@ctg.u-toyama.ac.jp

突撃質問ですが、丁寧に答えてくれたことが嬉しかったのを覚えています。

その数年後、トントン拍子に話が進み、バージニア大の Menaker Lab でポスドクとして雇ってもらえることになりました。それは、私という個人ではなく、それまでに関わった多くの日本人研究者の方々が築いた日本人への信頼、出身研究室への評価によるところが大きかったと理解しています。

Menaker Lab のラボミーティングでは、時々、研究上の昔話を聞かせてくれました。松果体に概日時計が存在することを証明したスズメの松果体移植実験に初めて成功したときのこと[1]、タウ変異ハムスターを発見したときのこと[2]、時間生物学の分野においては、節目となってきた大きな発見につながる研究が、どのように進められたのかを聞くのは、発見のその場に居合わせたようなワクワクした気分になりました。そして、大体、何らかの裏話があって、おかしかったり、教訓が込められていたりするのでした。そんな昔話だけでなく、雑談が好きだった Mike は、「Hello people！」と言って、ポスドクや院生がいるラボに現れるのが日課でした。話題は最近目にした論文の内容から、政治、時事問題、紅茶の入れ方、ターキーの焼き方と多岐にわたっていました。もしかしたら、サイエンスでないことの方が多かったかもしれません。そして「See you later.」と自分のオフィスに戻っていこうとするのを呼び止めて、新しく出た実験結果を見せたりするのでした。

Mike のオフィスは、在室中はいつもドアが開いてました。動物舎や実験施設のあった CBT に行くには、その前を通るのですが、行ったり来たりしていると、何度目かには室内から大きく手招きをして呼び止められ、実験の様子などを聞かれることもよくありました。研究の進め方について、細かいことをとやかく言われることはありませんでした。しかし、私の興味や強みが生かせる方向に進められるように、大局から見たアドバイスを、折に触れて与えてくれました。

Menaker Lab に所属してから、初めての論文を書いた時のことです。原稿を渡してしばらく経ったある日、原稿がどうだったかを聞きに行きました。答えは、「Your logic is clear. Your English is bad.」。はっきり“bad”と言われているのですが、全く嫌みがない口調で、取りあえず半分は褒められているとポジティブに捉えることができました。マイクの言葉や口調の中には、いつもそんな風に思わせてくれる何かがあったように思います。

2018 年 5 月、フロリダでの SRBR に参加した後、バージニア大のあるシャーロッツビルを 9 年ぶりに訪ね、Mike と Menaker Lab 時代のポスドク仲間の 3 人でランチに出かけました。思い出話に花を咲かせ、お孫さんの成長ぶりを聞き、新しく教える授業のことを話してくれ、楽しいひと時でした。その後、Menaker Lab のあった Gilmer Hall の前まで車で送ってくれました。車を停めると、わざわざ車を降りてハグをし、「You have to come back soon.」「Yes, I will.」そう約束したのに、果たせないままとなってしまい、残念でなりません。

「That's wonderful, Tomoko」
今でも耳に響いてきます。そう言ってもらえるような研究を続けていくことで、たくさんのことを教えてくれた Mike への恩返しが、少しでもできればと思います。

参考文献

1. Zimmerman NH, Menaker M. Neural connections of sparrow pineal: role in circadian control of activity. *Science* **190**: 477-479, (1975).
2. Ralph MR, Menaker M. A mutation of the circadian system in golden hamsters. *Science* **241**: 1225-1227, (1988).

Mike Menaker （左から２人目）、下村氏（中央）とその家族（右）。Menaker 宅にて（1994 年）。

Mike Menaker（左）と山崎氏（右）。Menaker 宅にて（2001 年）。

バージニア大の Menaker Lab では、ラボを去るときに名前と在籍年が刻印されたジェファーソンカップ*が贈られる伝統があった。
このカップの刻印は下記の通り。

Tomoko Yoshikawa
Menaker Lab
2001-2007

*バージニア大の創立者である Thomas Jefferson がデザインしたとされる。